

小城市立 小中一貫校 芦刈観瀾校 学校だより 30【11月号③】

# ともに



平成29年11月22日発行 <文責> 校長:濱崎 豊治 副校長:北村征一郎

## 「交流の秋」の観瀾校、充実！

芦刈観瀾校では、「人と人とのつながり・関わり」を大切に、みんなが笑顔になれるように取組を続けています。それらを「交流の秋」11月の取組としてまとめてみました。①児童生徒と児童生徒との交流、②児童生徒と地域との交流、③児童生徒と先生との交流、④地域社会教育活動における交流、⑤専門委員会との交流等を御紹介します。

### ① 3年生と7年生が「福祉の学習交流」

8日(水)に3年生が7年生の教室を訪ねました。7年生が総合的な学習で学習した内容等を聞き取り、3年生で取り組んでいる福祉の学習に生かすための小中一貫校ならではの学習交流です。3年生は、7年生にいろいろなことを質問して学びを深め、7年生もやさしく答える中で、自分達が学習したことをふりかえって伝えるよき機会となりました。また、3年生では、9日(木)に総合的な学習として、「小城市手話サークル」10名の方々を招いての「福祉体験学習」を実施しました。体が不自由な人々の思いに寄り添い、自分ができること、社会で支えていくこと等を学ぶことができました。手話サークルの方々からは、「子ども達の素直で純粋な姿が心をうちました。子ども達がみんな熱心に取り組み、学んでくれたことがとても嬉しかった。」と涙を流して話してくださいました。3年生と7年生は、車椅子体験学習等にも取り組んでいます。



### ② 2年生が笑顔の「芦刈音頭練習会」

16日(木)に、芦刈音頭保存会から2年生に御指導いただき、芦刈地域の伝統音頭をみんな意欲的に楽しく練習しました。2年生の子ども達は、歌や曲に合わせて体を動かすことが大好きです。観瀾校では、毎年2年生で実施している貴重な交流ですが、保存会の皆様には、御忙しい中に子ども達のために御指導いただきありがとうございます。



### ③ 「教育相談週間」で児童生徒理解を深める

小中学部ともに、9日(木)から17日(金)までの1週間実施しました。(9年生は、三者面談前の二者面談にて適宜実施)事前に児童生徒一人一人に「心のアンケート」をとり、それを生かしての面談により、児童生徒一人一人の思いに寄り添い、理解を深める全校的な機会としています。相談の内容としては、関心事、学習や生活、人間関係等で困っていることや悩み、中学部では進路や将来に向けての悩み等があります。今回の教育相談を今後の児童生徒一人一人に応じた支援等に生かし、一人一人の笑顔につなげていきたいと思っております。



### ④ 芦刈公民館主催の「通学合宿」終わる

12日(日)から18日(土)までの1週間、芦刈公民館の主催により4年生4名、6年生7名、計11名が参加しました。家庭を離れて、他の子ども達と寝食を共にした集団生活により、いろいろなことに気づき学ぶ、よき生活経験になったことでしょうか。このような体験は、子ども達をさらに強くたくましくしていくよき機会であると思っております。通学合宿は、毎年実施されている公民館行事であり、来年度も募集予定とのことです。



### ⑤ 「第2回学校評議委員会」を開催

14日(火)に開催しました。会では報告並び意見交換として、①全国・県学力学習状況調査の分析結果と対策、②6月から11月までの学校行事、③体罰及びいじめ、④部活動休養日の設定、⑤地域連携の取組、⑥学校評価アンケート、⑦今後の行事予定、⑧その他意見交換を行いました。いただいた御意見・御感想は以下の通りです。全職員で共有し、今後の学校づくりに生かしてまいります。学校評議員の皆様には、御忙しい中に御出席を賜り、貴重な御意見等もいただき感謝申し上げます。



- 学力の分析結果はわかりやすかった。全職員で共通理解し、しっかりと授業改善を進めてほしい。
- 学力向上では、読み書き計算を大切に、自ら考え表現する学習機会をもつことが大切である。
- 部活動は大切であり、生徒も保護者・家族も楽しみにしている。しかし、実施に課題が多いこともあり、休養日等については、これからの部活動改善に向けて周りに働きかけていく第一歩である。
- 文化発表会は、今年から全学年が参加する形となりとてもよかった。観瀾校のよき環境、よき文化の中、きちんと礼をしたり、挨拶をししたりして清々しく穏やかに子ども達が育っていて嬉しい。
- 子ども達の携帯へののめり込みや依存等は心配である。学校で開催された「情報モラルの教育講演会」は、大人も子どもも大変参考になるものであり、とてもよかった。家庭での教育、しつけが基本だが、学校やPTA等との連携は必要である。
- 掲示物や環境がよく整えられている。伝統的に地域との連携がすばらしい。高齢化するボランティアの方々を次の世代に引き継ぐための連携の輪を今後はさらに広げていくことが必要である。